



日本植物病理学会ニュース 第67号

(2014年8月)

【日本植物病理学会創立100周年記念事業実行委員会活動報告】

日本植物病理学会は平成27年に創立100周年を迎える。当学会では、日本植物病理学会創立100周年記念事業（以下記念事業）実施の可否について、平成21年8月に評議員を対象にアンケート調査を行い、賛同多数を得て、実施することを同年11月の第1回臨時評議員会で決定した。これを受け、常任評議員からなる日本植物病理学会100周年記念事業準備委員会（難波委員長）（以下準備委員会）を設置し、翌平成22年から記念事業に向けた準備を進めてきた。同年4月と10月に2回の準備委員会を開催し、記念事業計画の大綱を決定した。さらに同年11月に日本植物病理学会100周年記念事業暫定実行委員会を開催し、日本植物病理学会100周年記念事業実行委員会（以下実行委員会）組織を決定した。平成23年5月に第1回実行委員会を開催し、以降、これまで計7回実行委員会を開催し、記念事業の実行・準備を行ってきた。

記念事業実行委員会の組織は難波委員長のもと、シンポジウム小委員会（上田委員長）、記念出版編集小委員会（大島委員長（～平成25年）・岩井委員長（平成26年～））、記念誌編集部会（吉川部会長）、レビュー出版部会（奥野部会長）、式典・特別講演小委員会（難波委員長）、祝賀会小委員会（桑田委員長）、財務小委員会（夏秋委員長）により構成され、それぞれの小委員会・部会において記念事業の実行・準備を進めている。記念事業の概要と実行・準備状況は以下の通りである。

なお、平成26年6月に南北関東地区会員より構成される100周年記念式典等運営委員会を組織し、日本植物病理学会創立100周年記念式典等（以下記念式典等）の実施に向け、準備を開始した。

(1) 記念式典等の開催

平成27年3月28日に記念式典等（記念式典・講演、シンポジウム、祝賀会）を開催する。平成26年度会長（土屋会長）を実施責任者として、記念式典・講演を明治大

学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区）で、シンポジウムを明治大学リバティータワーで、祝賀会（大会懇親会を兼ねる）を東京ドームホテル・天空の間（東京都文京区）で開催し、翌日から始まる平成27年度大会（平成27年3月29日～31日、桑田大会委員長）と連動させる。

(2) 100周年記念英文レビュー・和文総説の出版

英文誌（*Journal of General Plant Pathology: JGPP*）ならびに和文誌（日本植物病理学会報）にそれぞれ英文レビュー、和文総説を掲載する。植物病理学の様々な研究分野において活躍中の会員が執筆を担当し、英文レビューについては既にJGPP (2013) 79巻4号から掲載を開始しており、JGPP (2014) 80巻6号まで掲載される予定である。和文総説については日本植物病理学会報80巻の特別号として出版し、平成26年末に発送を予定している。

(3) 日本植物病理学100年史の出版

学会創立100周年を記念し、我が国の植物病理学研究の歴史をまとめた記念誌を出版する。植物病理学研究史に加え、日本植物病理学会史、人物史、国際協力の歴史、関連の年表ならびに資料を掲載する。当学会会員を中心に執筆を担当し、部会長のもと、日比委員、眞山委員が全体校閲を行い、山田顧問が適宜加筆を行う。記念式典等の記録も掲載されることから、出版・発送は記念大会終了後となる予定である。

【会員の動静】

1. 人事

(1) 大学関係

小松 健	H26.1	東京農工大学 テニユアトラック推進機構 特任准教授（配置、農学部 植物病理学研究室）
本藏良三	H26.3	[退職 宮城大学 食産業学部 植物病理学研究室 教授]

堀江博道	H26.3	〔退職 法政大学 生命科学部 植物医科学専修 教授〕	吉田めぐみ	H26.4	農研機構・東北農研 生産環 境研究領域 主任研究員
中村茂雄	H26.4	宮城大学 食産業学部 植物 病理学研究室 教授	中野正明	H26.4	農研機構・近中四農研 四国 農業研究監
山次康幸	H26.4	東京大学 大学院農学生命科 学研究科 植物病理学研究室 准教授	竹中重仁	H26.4	農研機構・近中四農研 企画 管理部長
前島健作	H26.4	東京大学 大学院農学生命科 学研究科 植物病理学研究室 特任助教	森脇丈治	H26.4	農研機構・九沖農研 水田作・ 園芸研究領域 主任研究員
キム オッキョン			高橋 章	H26.4	生物研・副研究主幹
	H26.4	東京農業大学 農学部 植物 病理学研究室 助教	加藤雅康	H26.4	JIRCAS・生物資源・利用領域 主任研究員
石川成寿	H26.4	法政大学 生命科学部 応用 植物科学科 教授	宮川久義	H26.3	〔退職 農研機構・近中四農研 水田作研究領域 上席研究員〕
大島研郎	H26.4	法政大学 生命科学部 応用 植物科学科 教授	中島 隆	H25.10	農林水産省農林水産技術会議 事務局 研究調整官
岡野夕香里	H26.4	静岡大学 大学院農学研究科 植物病理学研究室 特任助教	秋本千春	H26.4	農林水産省農林水産技術会議 事務局 遺伝資源専門官
石黒 泰	H26.4	岐阜大学 流域圏科学研究セ ンター 流域水環境リーダー 育成プログラム推進室 助教	塚本貴敬	H26.4	横浜植物防疫所 業務部 統 括植物検疫官（国内担当）
近藤秀樹	H26.4	岡山大学 資源植物科学研究 所 植物・微生物相互作用グ ループ 准教授	唯 伸二	H26.4	横浜植物防疫所 業務部 次 席植物検疫官
豊田和弘	H26.4	岡山大学 環境生命科学研 究科 植物機能開発学講座 教 授	(3) 都道府県試験研究機関関係		
佐藤育男	H26.6	名古屋大学 大学院生命農学 研究科 植物病理学研究分野 助教	田中文夫	H26.4	北海道立総合研究機構道南農 試 場長
宇佐見俊行	H26.7	千葉大学 大学院園芸学研究 科 植物病学研究グループ 准教授	清水基滋	H26.4	北海道立総合研究機構中央農 試病虫害部 部長
(2) 農水省関連独法関係			長濱 恵	H26.4	北海道立総合研究機構上川農 試地域技術グループ
白川 隆	H26.4	農研機構・総合企画調整部 研究管理役	美濃健一	H26.4	北海道立総合研究機構上川農 試生産環境グループ
染谷信孝	H26.3	農研機構・総合企画調整部 主任研究員	池田幸子	H26.4	北海道立総合研究機構北見農 試生産環境グループ
赤松 創	H26.4	農研機構・中央農研 病虫害 研究領域 上席研究員	西脇由恵	H26.4	北海道立総合研究機構中央農 試クリーン病虫害グループ
上杉龍士	H26.4	農研機構・中央農研 病虫害 研究領域 任期付研究員	山名利一	H26.4	北海道立総合研究機構中央農 試予察診断グループ
石黒 潔	H26.4	農研機構・東北農研 所長	栢森美如	H26.4	北海道立総合研究機構十勝農 試生産環境グループ
			赤平知也	H26.4	(地独) 青森県産業技術セン ターりんご研究所 研究管理 員
			山本晋玄	H26.4	青森県農林水産部食の安全・ 安心推進課 主査
			勝部和則	H25.4	岩手県農林水産部農業普及技

		術課技術環境担当 主任主査			室 副主査
岩館康哉	H25.4	岩手県農林水産部農業普及技術課技術環境担当 主任	植松清次	H26.4	千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所生産環境研究室 主任上席研究員
富永朋之	H25.4	岩手県農業研究センター環境部病理昆虫研究室 上席専門研究員	鐘ヶ江良彦	H26.4	千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所生産環境研究室 研究員
大場淳司	H26.4	宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部 副主任研究員	横山とも子	H26.4	千葉県農林総合研究センター最重点プロジェクト研究室 主席研究員
菅原 敬	H26.4	山形県村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課 主任専門普及指導員	大谷 徹	H26.4	千葉県農林総合研究センター病理昆虫研究室 主席研究員
早坂 剛	H26.4	山形県立農業大学校稲作経営学科 教授	久保周子	H26.4	千葉県農林総合研究センター研究マネジメント研究室 上席研究員
越智昭彦	H26.4	山形県農業総合研究センター食の安全環境部 専門研究員	菅原優司	H26.4	東京都小笠原支庁産業課小笠原亜熱帯農業センター 研究員
後藤新一	H26.4	山形県農業総合研究センター園芸試験場園芸環境部 主任専門研究員	北 宜裕	H26.4	神奈川県農業技術センター 所長
勝又治男	H26.3	[退職 福島県農業総合センター会津地域研究所]	植草秀敏	H26.4	神奈川県農業技術センター生産環境部 部長
堀越紀夫	H26.4	福島県農業総合センター会津地域研究所 主任研究員	小林正伸	H26.4	神奈川県農業技術センター病害虫防除部 専門員
平子喜一	H26.4	福島県農業総合センター生産環境部 部長	市川和規	H26.4	山梨県総合農業技術センター 所長
伊藤瑞穂	H26.3	[退職 茨城県農業総合センター園芸研究所病虫研究室 流動研究員]	山下 亨	H26.4	長野県農業試験場環境部 部長
岡田 亮	H26.4	茨城県農業総合センター園芸研究所病虫研究室 任期付研究員	小木曾秀紀	H26.4	長野県野菜花き試験場環境部主任研究員
石川成寿	H26.3	[退職 栃木県農業試験場研究開発部病理昆虫研究室 主任研究員]	江口直樹	H26.4	長野県農政部農業技術課研究普及係 担当係長
中山喜一	H26.4	栃木県農政部 経営技術課技術指導班 班長	藤永真史	H26.4	長野県農業試験場企画経営部主任研究員
和氣貴光	H26.4	栃木県農業試験場 研究開発部 生物工学研究室 主任	市川 健	H26.4	静岡県農林技術研究所果樹研究センター 研究統括監
柴田 聡	H26.4	群馬県農業技術センター企画部 研究調整官	加藤公彦	H26.4	静岡県農林技術研究所 研究統括監
酒井 宏	H26.4	群馬県農業技術センター環境部 病害虫係長	伊代住浩幸	H26.4	静岡県経済産業部農林業局農山村共生課 主査
塩田あづさ	H26.4	千葉県立農業大学校農学科 副主幹	石井加奈子	H26.4	静岡県西部農林事務所地域振興班 主任
鈴木達哉	H26.4	千葉県担い手支援課技術振興	堀 武志	H26.4	新潟県長岡地域振興局農林振興部
			石川浩司	H26.4	新潟県農林水産部 経営普及

向島博行	H26.3	課（農業総合研究所兼務） [退職 富山県農林水産総合技術センター園芸研究所 副所長]	西村文宏	H26.4	香川県農業試験場生産環境部門 主任技師
岩田忠康	H26.4	富山県高岡農林振興センター 担い手支援課 課長	楠元智子	H26.4	愛媛県農林水産研究所果樹研究センター病理昆虫室 主任研究員
守川俊幸	H26.4	富山県農林水産総合技術センター農業研究所病理昆虫課 課長	甲把（安達）理恵	H26.4	高知県農業振興部環境農業推進課 主幹
三室元気	H26.4	富山県農林水産総合技術センター農業研究所病理昆虫課 主任研究員	井手洋一	H26.4	佐賀県生産振興部園芸課 主査
川部眞登	H26.4	富山県農林水産総合技術センター園芸研究所花き課 主幹 研究員	善 正二郎	H26.4	佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部 係長
濱田亜矢子	H26.4	石川県農林水産部農業政策課 農業参入・経営戦略推進室 技師	古田明子	H26.4	佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部 主査
福島朋行	H26.4	福井県農林水産部地域農業課 主任	野口真弓	H26.4	佐賀県果樹試験場病虫害研究 担当 副主査
足立昌俊	H26.4	岐阜県飛騨農林事務所農業普及課	正司和之	H26.4	佐賀県上場営農センター畜産・果樹研究担当 副主査
三宅律幸	H26.4	愛知県農業総合試験場環境基盤研究部生物工学研究室 室長	小川哲治	H26.4	長崎県県北振興局農林部北部 地域普及課 係長
福田至朗	H26.4	愛知県農業総合試験場企画普及部企画調整室 主任研究員	祖田嘉教	H26.4	大分県農林水産部園芸振興室 主査
小坂能尚	H26.4	[退職 京都府農林水産技術センター 主査]	久野公子	H26.4	宮崎県総合農業試験場病虫害 防除・肥料検査課 主査
久下一彦	H26.5	京都府農林水産技術センター 農林センター 環境部 専門幹	河野亜希子	H26.4	宮崎県児湯農林振興局農業経営課 技師
菱池政志	H26.4	和歌山県農業試験場環境部 主査研究員	西 八束	H26.4	鹿児島県大隅地域振興局農林 水産部曾於畑地かんがい農業 推進センター農業普及課 茶 普及係長
佐古 勇	H26.4	鳥取県西部普及所大山普及支所 所長	中西善裕	H26.4	鹿児島県農産物加工研究指導 センター流通保存研究室 主任 研究員
長谷川 優	H26.4	鳥取県農業振興戦略監とっとり 農業戦略課 専技主幹	野島秀伸	H25.4	鹿児島県大島支庁農林水産部 農政普及課 特殊病虫害係 技術専門員
吉原茂昭	H26.4	山口県庁農林水産部農業振興課	河野伸二	H26.4	沖縄県農林水産部八重山農林 水産振興センター農業改良普及課 課長
田村 収	H26.4	徳島県立農林水産総合技術支援センター資源環境研究課 主任	2. 学位取得者（課程博士・論文博士）		
亀代美香	H26.4	徳島県吉野川農業支援センター 係長	内堀美和	H25.6	東京大学 大学院新領域創成 科学研究科 博士(生命科学) タバココナジラミのトマト黄

- 化葉巻ウイルス媒介機構に関する研究
鈴木啓史 H25.9 神戸大学大学院農学研究科 博士（農学） 三重県における薬剤耐性いもち病菌の個体群構造と動態
- Md. Emran Ali H25.9 愛媛大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） Studies on RNA silencing-mediated resistance to tobamovirus in melon and tobacco plants
- Gupta Meenu H25.9 愛媛大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） Studies on regulatory mechanisms of hypersensitive responses in *Nicotiana benthamiana*
- Huy Duc Nguyen H25.10 鹿児島大学大学院（佐賀大学配置）連合農学研究科 博士（農学） Studies on the spatial and temporal evolution of Turnip mosaic virus
- 甲把（安達）理恵 H26.3 北海道大学 大学院農学院 博士（農学） 高知県における園芸作物病害の総合的な防除モデル構築に関わる病原微生物の分類学および発生生態学的研究
- 対馬太郎 H26.3 岩手大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） ウイロイドの分子進化と伝染性に関する研究
- Juliane Karine Ishida H26.3 東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士（農学） Transcriptome analysis of the parasitic plant *Phtheirospermum japonicum*
- 岡野夕香里 H26.3 東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士（農学） 植物ウイルスの増殖制御機構とその病原性に関する研究
- 菅原杏子 H26.3 東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士（農学） ファイトプラズマのてんぐ巣症状誘導因子 TENGU のプロセッシングと病徴誘導能に関する研究
- 山崎睦子 H26.3 東京農工大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） 高知県におけるニラとショウガの土壌伝染性病害の発生生態と防除に関する研究
- 荒添貴之 H26.3 明治大学 農学研究科 博士（農学） イネいもち病菌ゲノムへの DNA 二本鎖切断導入と体細胞相同組換えに関する研究
- Radix Suharjo H26.3 静岡大学 創造科学技術大学院 博士（農学） Studies on the taxonomy and identification of *Dickeya* spp. and *Pectobacterium* spp. isolated in Japan
- Sbaihat Layth H26.3 名古屋大学 大学院生命農学研究科 博士（農学） Studies on induced resistance in plants elicited by *Sargassum fusiforme* products（ヒジキ成分により誘導される植物の病害抵抗性に関する研究）
- Niones Jennifer Tagubase H26.3 名古屋大学 大学院生命農学研究科博士（農学） Elucidating the molecular mechanisms of epichloae endophyte in plant protection against grass pathogens（牧草共生糸状菌 epichloae エンドファイトによる宿主植物の病害抵抗性向上の分子機構）
- Mohammad Ziaur Rahman H26.3 岐阜大学 大学院連合農学研究科 博士（農学） Re-evaluation of Japanese *Phytophthora* isolates

- based on molecular phylogenetic analyses
- 田島由理 H26.3 京都大学 農学研究科 博士 (農学) Molecular mechanisms of programmed ribosomal frame-shifting and cap-independent translation of Dianthovirus (ダイアンソウウイルスのフレームシフト翻訳とキャップ非依存的翻訳の分子機構)
- 兵頭 究 H26.3 京都大学農学研究科 博士(農学) Host factors involved in RNA replication of Dianthovirus (ダイアンソウウイルスのRNA複製に関わる宿主因子)
- 伊藤 慎 H26.3 愛媛大学 大学院連合農学研究科 博士(農学) Tabtoxinine- β -lactam による細胞死誘導機構の解明
- 中野真人 H26.3 愛媛大学 大学院連合農学研究科 博士(農学) 青枯病菌-タバコ植物相互作用におけるリン脂質代謝経路の役割に関する研究

3. 海外長期出張者

- 望月知史 大阪府立大学 (H26.4~27.3) 米国 ペンシルバニア州立大学農学部
- 飯田祐一郎 農研機構・野茶研 (H26.4~ H27.3) オランダ ワーゲニンゲン大学

【新入会員情報】

- 森 万菜実 北海道立総合研究機構中央農試クリーン病害虫グループ
- 草野尚雄 茨城県農業総合センター園芸研究所 病虫研究室 主任研究員
- 渡辺賢太 茨城県農業総合センター園芸研究所 病虫研究室 技師
- 墨岡宏紀 静岡県農林技術研究所 研究員
- 藪 哲男 石川県農林総合研究センター農業試験場生物資源グループ 主任研究員
- 上垣陽平 石川県農林総合研究センター農業試験場生物資源グループ 技師
- 米田恵美 大分県農林水産研究指導センター農業研究部花きグループ 主任研究員

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成 26 年度日本植物病理学会大会は 6 月 2 日 (月) から 4 日 (水) までの 3 日間、札幌市の札幌コンベンションセンターにおいて開催されました。札幌の 6 月は本州の春のような季節なのですが、夏を思わせる晴天となり、学会期間中はむしろ暑いくらいでした。北海道には 8 年ごとに大会の順番が回ってきますが、周囲に植物病理学教室をもつ大学がないことから、北大が必ず中心になって行わなければならない事情があり、国の北農研センターや道の農業試験場の研究員の皆様には大変なご尽力をいただきました。さらに、今年は、ホームページにプログラムを早期に公開して発表者に修正をお願いするなど、例年にはない取り組みを行いましたので、プログラム委員の畑谷達児先生や庶務・会計の犬飼剛先生には多大なご苦勞をおかけしました。また、今年から初めて発表用のファイルを USB 媒体で提出してもらうことにしたために、スライド受付の松村健先生には大変な重荷をおかけしてしまいました。大会運営にご協力いただきました運営委員会・実行委員会の皆様に改めまして感謝いたします。

今年度の講演題数は 405 題でしたが、学生の発表が例年に比べて 1 割ほど減少し、6 月に変則的に行ったことにより、就活などとのバッティングで思わぬしわよせとして現れたものと考えています。最終的な大会参加者は 850 名ほどになり、札幌グランドホテルで開催した懇親会は 450 名を越える参加者を数えて大盛況に開催することができました。運営委員会では、来年度に 100 周年を迎える日本植物病理学会の「前夜祭」としてこの懇親会を位置づけまして、スライドプロジェクターによる上映により、100 周年に係のあるスライドや北海道の植物病理学の歴史などを紹介いたしました。記念事業実行委員長の難波成任先生から来年に行われる 100 周年記念の行事について参加者にご説明いただき、学会をあげての祝賀気分が盛り上がりました。

最後になりますが、札幌での大会が無事終了できましたことを、本大会の開催にサポートいただきました学会役員、評議員の皆様、そして学会にご参加くださったすべての皆様に改めて厚くお礼申し上げます。(増田 税)

永年会員ご寄稿

平成 26 年度日本植物病理学会大会に参加して

今年度日本植物病理学会大会は、2014 年 6 月 2 日~4 日、札幌市東札幌のコンベンションホールで開催された。連日晴天高温に恵まれた。参加者も 800 人を越えた。

大会は通常毎年 3 月末に開かれるが、北海道が会場にな

る時はライラックの花が咲くこの時期に開かれる。私にとっては岡山で開かれた大会以来 14 年振りであった。70 歳を超え、現職を離れ、老人ホームに入居する身で、体調も少し低調だったので、あえて出なくてもと思っていた。2004 年図らずも永年会員に推挙され、最近秋に開かれる北海道部会の談話会と懇親会に出席するようになった。

2013 年 11 月の学会報に大会の札幌開催のお知らせがあり、2015 年は 100 周年であると出たので、早速出席申し込みを済ませ、最近になって大会プログラムと参加費の領収書と名札も届いた。近着の学会報には、岡山大会の時ホテルで御馳走になった先輩の鈴木直治さん、続いて與良清先生の計報が掲載され、淋しい思いだった。去年秋亡くなった赤井純さん、柳田驥作さんのことも思い出される。

○大会総会

6 月 2 日開会式に遅れないように、軽く朝食を済ませ、地下鉄琴似駅までタクシーを飛ばし、東札幌で下車、徒歩 10 分、8 時半ころ会場に到着、ホールには現大会長の百町教授、北大の近藤教授、生越教授、新潟大学の小島教授が居られ、旧交を温めた。四方教授は体調を損ねておられるとのこと、回復を祈る。

レブンアツモリソウと思われる鉢が置かれていた。永年会員の席には生越、小島のお二人だけだった。梶原敏弘、岸國平、荒木隆男の諸氏の姿が見えないのは淋しかった。

9 時、開会、近藤さんが司会で、先ず逝去会員への黙とう、大会委員長の増田教授の開会の辞、会長の百町さん（岐阜大）の挨拶に次いで、議事に入る。特に問題なし。次いで、新会長土屋健一さん（九州大）、副会長の寺岡徹さん（農工大）の挨拶、名誉会員の推挙状授与。永年会員は出席が無かった。各賞の授与の後、新会長の講演「青枯病菌の遺伝的多様性と病害防除戦略」、学会賞受賞者の講演で昼の休憩となる。学術奨励賞受賞者の講演は午後の各会場で行われた。

なお、来年の大会は創立 100 周年記念事業のため、会期は 4 日となり、3 月 28 日（土）明治大学で記念式典、記念講演、記念シンポジウムが開かれ、祝賀会が、懇親会と合わせて行われ、100 周年記念レビューが 2014 年秋に発行される。

○一般講演

一般講演は 5 会場で行われた。昔の発表形式とは違い、PowerPoint を用い、とてもスムーズだ。同じマイクを使っても、声の大きい人と聞こえない人がいた。エアコンも適度で、快適だった。会場によっては、机が少なく、椅子だけだったり、後ろの方に立っている人もいた。何時になく、最後まで、講演を聞いた。

自分の聞いた菌類病については、新規発生病害、病原の遺伝子解析、植物の抵抗性解析、抗菌剤の耐性問題があった。遺伝子解析が頻繁に出て来るのは興味深かった。

○懇親会

初日午後 6 時半から札幌グランドホテル 2 階の会場で懇親会が開かれた。生越先生の御夫人が出席され、華を添えられた。永年会員になった神沢さんが出席され、名誉会員と一緒に壇上に登られ、挨拶された。石黒さん（東北農試）、内野さん（日本甜菜糖）も来られていた。弘前大の佐野さんが、弘前大学の香川寛さんが奥様を去年亡くされ、今年の 3 月に亡くなられたと教えて下さった。年賀状の返事が暫くなかったので、心係りで、色々な方に問い合わせていたのだった。

○第 14 回植物病原菌類談話会

3 日目の大会終了後、開かれた。私は初めて出席したが、菌核病にまつわる *Rhizoctonia*（三澤知央）、*Sclerotium*（窪田昌春）、*Sclerotinia*（齋藤泉）、*Typhula*（松本直幸）の講演が行われた。それぞれの方が取り組んだ菌の生き方を、菌学には縁の遠かった私も興味深く伺った。8 時半を過ぎていたので、妻の道子が心配していることを考えて、最後の講演を聞いて会場を後にした。14 年のブランクを感じない楽しい 3 日間だった。

○大会と私

考えて見ると、1952 年北大卒業の年、公務員試験に合格したので、卒業式の日採用試験が農林省で行われ、その後大会に出席し、帰宅した所、北海道農業試験場から来るように連絡があったと言われ、急いで出勤した。勤務場所は地下にあった富山研究室で、研究テーマは、ジャガイモ疫病。その内にこの研究室が病害抵抗性研究をすることになり、育種の高瀬さん、生理の酒井さんが加わり、それぞれがテーマを持って仕事をし、冬にはみんなで抵抗性に関して共同研究した。

その後、何年か毎に大会に出席した。その後、1963 年道立農試に転勤したが、時々大会に出席した。1966 年には 50 周年大会が安田講堂であり、出席したことを憶えている。1986 年、道を退官、先輩のお世話で、CIBA-GAIGY 日本支社で働いた。仕事の関係で、毎年大会に出席した。70 歳を越え、1999 年退職し、2000 年の岡山大会が最終回だった。

そして、今回 14 年振りに参加した。現職を離れ、発表する材料もないが、色々な発表を聞き、又知人と交流できるのは人生の幸いである。

振り返ると、既に亡くなった父が 1991 年 94 歳で東京の京王プラザで開かれた第 11 回国際石炭処理利用会議に出

席、ポスター発表をし、私もエスコートしたことを思い出した。歳を重ねても、色々な分野で活躍されている方の居られることを思った。健康が許せば、来年の100周年の大会には出席したいものである。（永年会員 高桑 亮）

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第14回植物病原菌類談話会

日本植物病理学会大会最終日の平成26年6月4日、閉会式終了後の16:30～20:40まで、札幌コンベンションセンター小ホールにて、大会開催地実行委員会である北海道大学の多大な協力も得て第14回植物病原菌類談話会を開催した。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、検疫機関、農薬や種苗会社、農業団体など、学生・研究者114名の参加があった。

今回の談話会のコーディネーターは名城大学の荒川征夫談話会幹事が務め、「泣きたかった、、、菌核病」というテーマの下、近年新病害報告が増加する病原菌のひとつである *Rhizoctonia*, *Sclerotium* 属菌等、菌核を形成する糸状菌類の分類や生態を含めた研究の成果について代表的な4名の研究者に総説、解説等の講演を頂いた。これら菌群による病害の初期感染は根系や地際部で起き、病徴が地上部に表れて見出される時点では手遅れになりがちで、検出・防除対策に難点が多かった。今回は、本菌群に焦点をあわせて、これら菌群の理解を深めると共に、発生事例を基にした病原菌の同定や診断のノウハウを専門の研究者に概説して頂いた。講演者とその講演題目は、三澤知央氏（北海道立総合研究機構 道南農業試験場）「専門家以外の方のための *Rhizoctonia* 属菌の同定法」、窪田昌春氏（農業・食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所）「*Sclerotium* 属の病原菌概説」、齋藤泉氏（NPO法人：北方菌類フォーラム）「低温性 *Sclerotinia* 属菌：分類、生態と種内分化」、松本直幸氏（北海道大学 農学研究院 造林学研究室）「菌核に反映される雪腐小粒菌核病菌の生活史戦略」であった。講演内容は、菌群の紹介、分類同定法、発生状況の記録法、分離法、形態観察法、遺伝子解析、菌糸融合群決定法、地理的分布、生態、生活史戦略等、多岐にわたり、極めて濃密な内容であった。

当初、紹介を用意していた国際藻類・菌類・植物命名規約の大幅改定に伴う、菌類の有性・無性学名の統一問題については、時間の不足から、今回はいもち病菌の学名に関する議論の現状等、簡単な報告内容に留め、次回以降の植物病原菌類談話会で詳細に解説ならびに話題提供を行うこととした。

開催準備にあたり多大なご支援を頂いた北海道大学の

会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせた本談話会の開催を予定しています。

（青木孝之）

(2) 技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー

平成26年度技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会（札幌コンベンションセンター）の会場にて、第3日目（6月4日）の13:00～14:30に、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。本セミナー開催に当たっては、増田 税大会委員長をはじめとする大会委員の皆様には会場設営などにあたって、特段のご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

技術士試験制度は、平成25年度より大きく改正された。今回は新制度のもとで初の合格者となった方々を講師に招き、「新試験制度合格者からの秘情報」としてセミナーを行った。まず、技術士対応委員長 難波成任氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）より、技術士制度概要と植物病理学会における技術士育成への取り組みについて説明があり、植物保護関連5学会として「農業部門・植物保護」の技術士が100人を超えることが当面の目標であること、本年12名が技術士二次試験に合格し、累計合格者数が82名に達したことなどについて紹介があった。次いで、技術士対応委員・技術士の濱本 宏氏（法政大学生命科学部）より、第一・二次試験の概略と受験申込みの手順について説明があった。続いて、「新試験制度の合格体験記」として佐藤 裕（秋田県果樹試験場）、菅原 敬（山形県西村山農業技術普及課）、堅石秀明（株式会社クレハ）の3氏より、新制度の技術士試験を受験するにあたってどのような勉強を行ったか、当日、何を心掛け、どのように解答したのか、さらに口頭試験にどのように臨んだのか、などの話を伺った。特に論述試験については、問題の選択からそれぞれの具体的な解答まで、大変貴重な話を伺うことができた。また、自分が解答した内容を問題用紙（途中退場しなければ持ち帰り可能）などにメモ書きし、内容を残しておくことが、後の面接に向け重要であることも紹介された。各氏よりご自身の体験について詳しい話が伺えたのも、そのメモ書きあつてのことであろう。本セミナーに参加され受験される皆さんにおかれても、ご自身の解答を、メモだけではなく思い出せる限りで書き起こして残していただき、今後の本セミナーなどの際にお話しいただければ幸いである。最後に、大上大輔氏（ホクレン農業協同組合連合会）、大島研郎氏（法政大学生命科学部）、栢森美如氏（北海道立総合研究機構十勝農業試験場）、それに、合格体験を話していただいた3氏と技術士第一次試験を合格された前島健作氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）にご登壇いた

だき、「試験対策パネルディスカッション」を会場からの質疑応答も交えて行った。まず、第一次試験の適性試験について、次いで第二次試験について平成 25 年度の試験問題の一部を紹介しながら、試験対策について話し合い、その後フリーな質疑応答を行った。試験対策にとどまらず、技術士制度活用への考えなども含め、将来に向けて活発な討議が時間をオーバーして行われ、盛況のうちにセミナーを終了した。

今回のセミナーは、技術士第二次試験対策に偏った内容となったが、今後、第一次試験受験希望者と第二次試験受験希望者それぞれに的確な情報を提供できるような開催形態を検討する予定である。なお、本セミナーで配布した資料は、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布されている。日本植物病理学会のホームページの「技術士」のタグを参照していただきたい。大会 3 日目の午後の開催であったが、セミナーの参加者は民間、大学、都道府県、独立行政法人等から 55 名を数えた。参加者並びに講演者に対し、主催者一同、心よりお礼を申し上げる次第である。

(技術士対応委員会)

3. 学生会員交換事業報告

2013 年度日本植物病理学会／Australasian Plant Pathology Society 学生会員交換事業

ニュージーランド Massey 大学訪問、APP Conference 参加を通して

日本植物病理学会 (PSJ) と Australasian Plant Pathology Society (APPS) の相互理解と交流を促進することを目的として、学生会員の交換事業の募集がありました。私は、将来研究を続けることを念頭に、①海外の研究室でどのように研究を行っているのか実際に研究室を訪問して経験したい、②日本人研究者として国際的な研究をするには何が必要なのか知りたい、③英語能力を向上させたい、という理由から本事業に応募しました。幸いにも本事業の派遣者として採択され、2013 年 11 月 13 日から 12 月 1 日までの 19 日間、ニュージーランドの Massey University に滞在し、その後 Australasian Plant Pathology Conference に参加することができました。

まず、研究室での滞在について報告します。ニュージーランド、パーマストンノースにある Massey University, Institute of Fundamental Science の Barry Scott 博士の研究室に 10 日間滞在しました。本研究室ではイネ科牧草と共生関係を築く *epichloe* エンドファイトの共生関係に関する分子生物学的研究で最先端の研究が進められています。滞在期間中には共焦点レーザー顕微鏡および透過型電子顕微

鏡を用いて、植物の葉鞘中を伸長する *epichloe* エンドファイトの菌糸の観察を行いました。サンプルには野生株と NADPH 酸化酵素遺伝子 NoxA の破壊株を用い、菌糸伸長の差異を比較しました。*epichloe* エンドファイトやこれらの顕微鏡を扱うのは初めての経験でしたが、ポスドクの方や顕微鏡解析部門の技術者の方が丁寧に説明して下さり、生体試料の観察の技術の習得が出来、*epichloe* エンドファイトの植物体への侵入過程や共生関係の構築についても、実際の作業を通じて深く学ぶことができました。また、滞在中は私の研究内容に関して約 1 時間のセミナーをさせて頂いたり、研究室に所属する 10 人の研究者の方からそれぞれの方の研究内容を紹介して頂いたり、ディスカッションをする機会を多く頂きました。研究室には年齢や性別、国籍や立場も異なる方が所属されていましたが、全員が「研究が面白い」「研究が好き」という同じ思いを持ち、生き生きと研究をし、徹底的に議論を重ねていました。それを目の当たりにし、研究に対する純粋な気持ちが研究者にとっての一番のモチベーションであり、必要なものであると認識することができました。

研究室滞在後、オークランド大学にて 4 日間にわたり開催された 19th Australasian Plant Pathology Conference 2013 に参加しました。学会では 139 題の口頭発表と 148 題のポスター発表があり、作物および自生植物の保護を目的として、菌類、バクテリア、ウイルス、線虫を専門とする研究者がオーストラリア、ニュージーランド、アジアから集いました。そこでは自分の専門分野外の発表も見聞きすることで、植物病理学における多様な分野を学ぶことができ、それにより自分の研究も客観的に捉えられるようになりました。本学会では学術的な発表の他に特別講義や学生に向けたセミナーもあり、研究者として将来どうすべきかを考えることが出来ました。私はポスター発表をし、幸運なことに学生ポスター賞を受賞することができ、また APPS の方の計らいで Biological Interactions and Plant Diseases のセッションにて Co-Chair も経験することが出来ました。これらの経験は大変貴重で光栄なものであり、今後の研究に対するモチベーションがさらに強くなりました。

この交換事業を通して、初めて独りで海外へ渡航し、初対面の人達の中でコミュニケーションを図るという経験をしました。そこで最も強く感じたのは、「行動する」ことの重要さです。私にとって独りで海外の研究室に訪問し、学会に参加することは大変ハードルが高く、「自分などが行っても良いのか」と思い悩んだこともありましたが、恐れずに勇気を持って一歩踏み出すこと、頭の中で考えるだけではなく実行に移すこと、それにより自分の目で見て

手を動かし、肌で感じることができました。そして、以前よりも新しい価値観が加わり、視野が広がりました。初めて挑戦するというのは難しいことだと思います。しかし、勇気を出して行動に移してみることは将来の自分に必ずプラスに働くと感じました。

また、海外の環境に置かれて初めて、自分は日本人であるということを意識しました。周りにいる人達とは見た目も言語も文化も違う。しかし、scienceはそれらの壁を越えて、同じフィールドに立って意見交換が出来る。このことに気づけたことで、私は日本人研究者として研究も自分自身も成長させ、外見ではなく中身で勝負していきたいと思うようになりました。大学院修了後には博士課程に進学しようと考えているので、謙虚な心で周りへの感謝を忘れないこと、素直でいること、自分の研究を大好きでいること、こ

れらを忘れず、ハングリー精神でさらに研究に励んでいきたいと思います。

今回の短期留学は今後の人生のキャリアを考える上でもとても重要な経験となりました。短期間ではありますが、渡航費の補助があり、自分で「実際に経験できる」ことは何にも変えられない貴重な機会であると思います。ぜひ、この事業が今後とも続いていかれることを心から祈願しております。

最後に、本事業で大変お世話になりました、PSJの夏秋啓子先生およびAPPSのEileen Scott先生、ならびに訪問先のMassey UniversityのBarry Scott先生、中条哲也博士、研究室の皆様、そして関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(京都府立大学 大学院博士前期課程2年 深田史美)



写真1. 学会に参加したMassey大学の方とともに



写真3. APPSの学会主催責任者でCo-ChairさせていただいたEileen Scott先生とともに

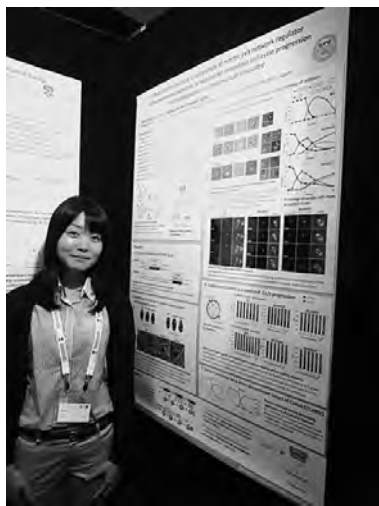


写真2. ポスター発表の様子



写真4. 学生ポスター賞授賞式にて

The University of Queensland Ecosciences Precinct を訪問して

日本植物病理学会（PSJ）と Australasian Plant Pathology Society（APPS）の相互理解と交流を促進するために、学生会員の交換事業の募集があった。筆者は、イネに発生するウイルスについて主としてウガンダで研究してきたが、先進国で熱帯農業や熱帯作物の病害研究にどのように取り組んでいるかを学び、また、海外研究機関で所属の研究者と交流を深める貴重な経験ができる機会であると考え、本事業に応募した。幸いにも本事業の派遣者として採択され、2013年12月3日から19日まで、クイーンズランド州にある、The University of Queensland Ecosciences Precinct を訪問する機会をいただいた。

The University of Queensland（UQ）はオーストラリア北部クイーンズランド州のブリスベンに位置し、12月の訪問時、現地の季節は夏で、滞在期間中は毎日28-30℃前後の

気温であった。Ecosciences Precinct（EP）はクイーンズランド政府からの補助を受けている、生命科学研究の基盤となっている研究所である。EPには博士研究員や博士課程の学生もたくさんおり、またオーストラリア国内のみならず、海外から学位取得のために滞在している学生が多く見られた。EPは、大学からバスで2駅程度の場所にある建物であることから、大学からは多少離れているものの、UQ構内にも留学生が多く、特にアジアからの留学生が多く見られた。EPでは、ウイルスのみならず、菌類についても広く研究を行っている。執筆者の受入れは主に Dr. André Drenth と Dr. Andrew Geering が対応してくださった。実験室は1人ずつ実験スペースが設けられており、筆者の所属する大学の研究室とは比較にならないほど大きい部屋で、まず驚いた。2年前に古い建物から引っ越してきたということもあるが、すべてが新しく、実験機材も充実していた。

滞在期間中、訪問先研究所で研究プロジェクトの一つに、



写真1. クイーンズランド大学・Ecosciences Precinct（ブリスベン クイーンズランド州）



写真3. 研究所でお世話になった方々。筆者は右から2人目、一番左が、Dr. André Drenth.



写真2. 広々とした研究室の様子



写真4. Dr. Andrew Geering と

Badnavirus 属 Banana streak virus 群の検出があることから、筆者も多くの熱帯作物に発生する Badnavirus 属の検出方法や、他ウイルスの検出等を学ぶこととした。このため、事前の打ち合わせを Dr. Geering と行ない、実験についても若干の準備をして臨んだ。特に、筆者の所属研究室でも研究しているバナナやアオキなどに発生する Badnavirus 属ウイルスについて内在性と外在性ウイルスの識別を行うため、rolling circle amplification (RCA) 法を用いて検出する手法を学んだ。最初に Badnavirus 属ユニバーサルプライマーを用いて、PCR 法で目的の位置にバンドがあるかを確認し、その後、TempliPhi reaction を行ない、さらに、制限酵素を用いて増幅した DNA を切断した。電気泳動でバンドパターンを見比べたところ、日本産アオキに発生している Badnavirus 属ウイルスについて新たな知見を得ることができた。PCR や電気泳動は、筆者も研究室で普段から行っている実験であるが、場所が変わっただけで、スムーズにいかなくなるのにはやや戸惑った。また、同じ実験であっても、新規の試薬や実験器具、キットを知ることができ、とても勉強になった。また、それらのうちのいくつかは早速、所属研究室でも導入した。

また、本滞在期間中に筆者の研究について発表する機会を設けて頂き、発表時間 20 分程度の小さな研究発表会を行った。英語でのプレゼンテーションは初めてで、不安な面は多くあったが、普段コメントを頂けないような専門の方々からもアドバイスを頂くことができ、とても良い機会であった。発表の冒頭で所属大学の紹介をし、筆者の所属研究室の写真を見せたところ、40 人を越える所属学生の多さに驚かれ、同時に研究室の狭さにも驚かれるという、楽しい体験もした。

滞在中は、研究所所属の学生さんたちや、ポスドクの方にとってもお世話になり、実験だけでなく、食事を一緒にし、ブリスベンの街を案内してもらったのも良い思い出である。筆者は研究のためにアフリカには数回滞在しているが、いつも指導教員や日本人研究者と一緒にだったことから、今回のように日本人が周囲に全くいないという経験は初めてだった。また、何より、先進国での研究体験も初めてだったことから、訪問前には色々な不安があった。しかし、受入れてくださった先生方、また、所属の学生さんが親切にサポートしてくださったおかげで、2 週間という短期間ではあったが、新しい技術の修得ができてだけでなく、オーストラリアの文化や生活様式なども学ぶことができた。

今回の滞在で出来た関係者の方々との繋がりを大切に、将来も植物病理の分野で活躍できるように精進していきたいと考えている。

最後に、本事業で大変お世話になりました、PSJ の皆様および、APPS の Eileen Scott 会長、ならびに訪問先である UQ の André Drenth 先生、Andrew Geering 先生や関係者の皆様に、改めて心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(東京農業大学 大学院博士後期課程 1 年 鵜家綾香)

【今後の学会活動予定】

1. 平成 26 年度部会

(1) 北海道部会

日時：2014 年 10 月 16 日（木）～17 日（金）

場所：かでる 2.7（札幌市）

(2) 東北部会

日時：2014 年 9 月 25 日（木）～26 日（金）

場所：岩手県民情報交流センターアイーナホール（盛岡市）

(3) 関東部会

日時：2014 年 9 月 11 日（木）～12 日（金）

場所：宇都宮大学農学部（宇都宮市）

(4) 関西部会

日時：2014 年 9 月 27 日（土）～28 日（日）

場所：富山大学共通研究棟（富山市）

(5) 九州部会

日時：2014 年 11 月 12 日（火）～13 日（水）

場所：ジェイドガーデンパレス・サンブラザ天文館（鹿児島市）

2. 談話会・研究会

(1) 第 27 回土壌伝染病談話会

日時：2014 年 9 月 24 日（水）～25 日（木）

場所：岩手県民情報交流センターアイーナホール（盛岡市）

(2) 第 8 回植物病害診断研究会

日時：2014 年 9 月 26 日（金）～27 日（土）

場所：富山大学五福キャンパス（富山市）

(3) EBC 研究会ワークショップ 2014

日時：2014 年 10 月 1 日（水）

場所：全農ビル（千代田区）

(4) 第 26 回植物細菌病談話会

日時：2014 年 10 月 9 日（木）～10 日（金）

場所：岡山空港温泉 レスパール藤ヶ鳴（岡山市）

【関連学会情報】

第 29 回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョン——2014』のご案内

—激動する農業環境における革新的技術と経営的評価—

趣 旨：我が国の農業は生産者の高齢化や耕作放棄地の拡大など深刻な状況にある。この局面を打開するため、農林水産省において消費者ニーズや輸出拡大などに対応できる生産の実現、大規模経営での生産体系の確立などを目指す「攻めの農林水産業」の実現に向けた取り組みが進められている。一方、病害虫・雑草の発生は農作物に甚大な影響を及ぼすことから、環境保全型農業での防除技術の開発が重要である。本シンポジウムでは、作物保護技術の現状を整理し今後の課題について討議する。

主 催：公益財団法人 報農会

協 賛：日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農業学会、日本雑草学会

日 時：平成 26 年 9 月 30 日（火）10:15～17:00

場 所：「北とぴあ」つつじホール（東京都北区王子 1-11-1）

TEL 03-5390-1100（会場への連絡は出来ません）

JR 京浜東北線・地下鉄南北線：王子駅下車、徒歩 2 分（下図参照）

開 会：10:15～10:30 挨拶 理事長 上路雅子

講 演：10:30～11:20 一次から六次へ、埼玉から世界へ
“今” だからできる農業の可能性
有限会社貫井園 貫井香織

11:20～12:10 臭化メチル剤から完全に脱却した産地適合型栽培マニュアル
（独）農研機構中央農業総合研究センター 津田新哉

12:10～13:20 昼食・休憩

13:20～14:10 高知県における天敵を中心とした IPM について

高知県農業振興部 古味 洋

14:10～15:00 飼料用米の生産現場での取り組み
岩手県花巻市農事組合法人 遊新高橋新悦

15:10～16:00 水稻の減農薬栽培導入に関する経営的・環境的評価

滋賀県立大学 環境科学部

増田清敬

16:05～16:45 総合討論

参加費：一般 2,000 円 学生 1,000 円

申込み：参加をご希望の方は、9 月 19 日までに下記連絡先まで E メールまたは FAX で所属・連絡先と氏名をお知らせ下さい。当日、参加費と引き

換えにテキストをお渡し致します。なお、当日の参加も可能です。

連絡先：公益財団法人 報農会

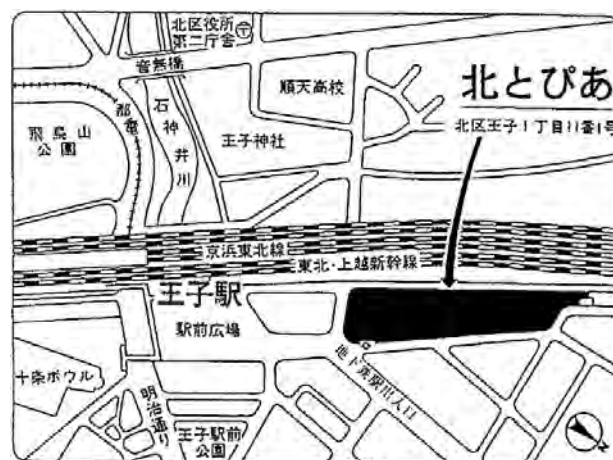
事務局：藤田肖子、渡辺敦子

〒 187-0011 東京都小平市鈴木町 2-846-105

サンウッド花小金井 101 号室

TEL/FAX 042-381-5455

E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp



【関連トピックス】

我が国未発生病害虫に関する情報提供のお願いについて

我が国農業生産への病害虫による被害の防止には的確な防除が必要です。特に我が国未発生の病害虫では、早期発見と初動対応が不可欠です。研究の中で、未発生の病害虫の発見情報があれば、最寄りの植物防疫所への情報提供をお願いします。

詳しくは、以下の HP を御覧ください。あるいは「重要病害虫発生時対応基本指針」で検索してください。

http://www.maff.go.jp/j/syoutan/syokubo/keneki/k_kokunai/ap/ap.html

（農林水産省 消費・安全局 植物防疫課 国内検疫班）

【書評】

梅津憲治 著「農業と食の安全・信頼～Q & A から農業と食の安全性を科学的に考える」

A5 判, 282 頁

2014 年 3 月, 日本植物防疫協会

ISBN: 978-4889261370

定価 2,800 円＋税

農業の必要性は専門家として認識はしているものの、いざ学



生達や実際の農業従事者に説明する段になった場合、新聞等のマスコミが紹介する記事内容や「奇跡のリンゴ」のような映画を考慮すると、ひじょうに注意深く話さねばならないことに気付く。すなわち、単なる農薬の長所や短所を考慮した必要性だけではなく、環境への影響、他の動植物への安全性、残留性を考慮した「食」の安全性など、むしろ我々の専門外の事案も含めて科学的に話さなければ、真の理解は得られないだろう。その意味で農薬学会が一般聴衆を対象に活発に広報活動をされてきたことは敬服に値する。本書の内容はその活動の中で一般聴衆の方々が抱かれている疑問・質問に科学的に答えるかたちで著されている。近年の農薬取締法の改正や残留基準のポジティブ・リスト化を背景に、その内容も以前、著者達が同じ趣旨で著されたものから大きく改訂、加筆されていると思われる。我々も認識を新たにす意味で一読の価値ある書と言えるだろう。

(寺岡 徹)

日本冬虫夏草の会 編著「冬虫夏草生態図鑑：採集・観察・分類・同定、効能から歴史まで 240 種類」

25.4 × 18.8 × 2.6 cm, 303 頁

2014 年 6 月、誠文堂新光社

ISBN: 978-4416714034

定価：4,500 円＋税

本書は生態図鑑と銘打たれているとおり、美しい写真と線画、詳細な記述と解説からなっている。日本産種 500 余種のうち、生態写真、すなわち標本のみならず発生地においてその冬虫夏草が見いだされた状態の写真、加えて菌学上重要な明解かつ正確な線画が添えられている。前半の 50 ページには、菌学に触れたことのない者が冬虫夏草とはなにか？から始まり、中学生程度の読解力があれば、研究対象としての冬虫夏草や分類・同定、研究史を学べるようになっている。これは本書がプロフェッショナルな研究者が主体で編纂されたものではなく、在野の同好の士が、研究者の指導を受けながら、なぜ？なに？から作り上げたことをよく示している。序によれば写真もやはり著名な生態写真家の厳しい指導を受け、納得の 1 枚を提供したとある。フィールドでも役に立つよう、宿主の目毎に種が配置されており、そのタブもそれぞれの目のイラストがアイコンとして描かれているのが愛らしい。

広義の冬虫夏草は昆虫・クモ類に子う菌が感染し、最終的に宿主の死後、キノコ様の菌体が虫体外に生じたもの

である。菌は宿主の生存中から虫体内で成長を続け、科学ドキュメントでも紹介されたアリタケの場合は、自らの胞子分散を有利にするため代謝産物により宿主を操り、高所へ移動させるといったことも知られている。最終的には宿主からテレオモルフである子実体（すなわち子う）がキノコ様に発達、もしくはアナモルフの分生子柄束・分生子を旺盛に形成するようになる。この過程を経ることで宿主の昆虫は異形の物に変えられるが、収録された写真からは生命の力強さを感じることができる。それどころか、変化、明王の憤怒相、輪廻転生といった宗教的なものさえ感じられる。これが多くの人々を引きつけている魅力の一つではなかろうか。狭義の冬虫夏草でチベット高原に産出するコウモリガの幼虫に寄生する *Ophiocordyceps sinensis* は、動物の性ホルモン様物質や多糖類を産生することが知られ、アジア各国で宿主ごと民間薬として珍重される。近年では創薬源としても研究が続けられている。しかし、このような利用は、そのひとつに過ぎない。本書にはアナモルフのみの広義冬虫夏草も収録されている。植物保護の現場において微生物農薬として用いられているボーベリア菌 (*Beauveria* 属菌：サンタクロースの衣装さながらに白色の菌体を宿主の節々から噴出させていますね) は、これまでアナモルフのみが知れていたが、ここ数年になって分子系統関係研究や子うの人工形成により、代表的な昆虫を宿主とする子う菌で、冬虫夏草属もしくはムシタケ属と称される *Cordyceps* 属菌とテレオモルフ・アナモルフの関係にあることが示された。これら昆虫に寄生する菌群は宿主と寄生者との関係が非常に密な菌群であり、第二第三のボーベリアの候補がこの一群から現れるかもしれない。ネパールに滞在していたころお世話になったチベット医僧も言っていたが、冬虫夏草を見つけやすい「坪」があるらしい。医僧は一子相伝で極秘と言ったが、本書にはその「坪」の解説まで載っている。好きだからこそ妥協しない、そして皆に伝えたい。プロフェッショナル集団の日本植物病理学会会員も、本書を片手に、アマチュアと同じフィールドに赴いてはいかがだろうか。

(中島千晴)



【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたく願います。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、宇垣正志、有江 力、宇賀博之、奥田 充

編集後記

学会ニュース第 67 号をお届けします。本号は、100 周年記念事業の進捗状況、および会員の動静を中心に掲載しました。

本会の創立 100 周年がいよいよ来年に迫ってきました。5 年前から進められている記念事業計画は着実に進捗し、記念英文レビューや和文総説の出版はすでに始まり、記念式典等の開催や 100 年史の出版も準備が最後の追い込みに入っています。皆さまには引き続き記念事業にご理解とご協力をお寄せいただくとともに来春の記念式典等への参加をお願い申し上げます。

会員の動静情報を掲載しました。今春も多くの方々の異動がありました。ご退職された会員の皆さま、長年のお勤めご苦労さまでした。新しいポストに就かれた皆さま、新たな気持ちでの一層のご活躍をお祈り申し上げます。学位取得の皆さま、おめでとうございます。海外留学の皆さまともどもこれを好機にさらなるご活躍を期待しております。新入会員を紹介する新入会員情報を新たに掲載することにしました。新入会員の皆さま、入会おめでとうございます。今後のご活躍を期待いたします。

今年度の大会は、開催地が北国の札幌である関係で変則的な 6 月開催となりました。この時季の札幌にしては珍しく暑くなりましたがさわやかな晴天に恵まれ幸いでした。参加者数が 850 名を越え、大会は盛会裏に終了しました。

大会委員長の増田税先生、副委員長の近藤則夫先生をはじめ北海道内の各大学、国、道の大会運営委員・実行委員の皆様には大変お世話になりました。準備、運営のご尽力に深く感謝の意を表したいと思います。大会後にはサテライトとして各種の研究会・談話会が開催されました。開催状況をご報告いただいた植物病原菌類談話会をはじめ、いずれの会も盛会でした。大会と植物病原菌類談話会にご参加された永年会員の高桑亮氏からは、大変有意義で楽しい会で参加してよかった、とのお言葉をいただきました。

大会 3 日目に技術士試験対策セミナーが行われました。「農業部門・植物保護」の技術士の合格者数が 82 名に達し、目標の 100 名超えが間近となっています。この成果には、受験された皆さまのご努力はもとより本セミナー開催など学会の取り組みも大いに寄与していると考えます。

オーストラリア植物病理学会との交流の一環として行われた学生会員交換事業によってニュージーランドあるいはオーストラリアを訪れた深田史美さんと鶴家綾香さんに訪問記を書いていただきました。お 2 人には、この貴重な経験を今後の研究生活に活かし、さらなるご活躍を期待します。

9 月から年末にかけて地域の部会や各種の談話会・研究会の開催が目白押しで予定されています。多くの皆さまのご参加をお願い申し上げます。

書評を 2 つ掲載しました。梅津憲治氏著書の「農業と食の安全・信頼」を寺岡徹先生に、「冬虫夏草生態図鑑」を中島千晴先生にご執筆いただきました。内容をわかりやすくご説明いただくとともに関心をそそるご紹介に感謝申し上げます。

本号から、会員に参考となると思われる情報を掲載する「関連トピックス」の欄を設けました。会員皆さまに広く紹介したい情報がありましたらどしどし学会ニュース編集委員会にお寄せください。

学会ニュース編集委員会のメンバーが変わりました。根岸寛光、芦澤武人が宇垣正志、奥田充に交代し、これまでの有江力、宇賀博之、高橋賢司との 5 人のメンバーで編集に取り組んでまいります。引き続きのご愛読をよろしくお願いいたします。

(高橋賢司)